

Asher Hirshberg/Kenneth L. Mattox (著)

行岡 哲男 (訳)

トップナイフ 外傷手術の技・腕・巧み

重 松 宏

(東京医科大学主任教授・外科学第2)

腹腔内出血で腹部は膨満し、意識レベルは既に患者の血圧とともに低下し、呼吸は促迫して脈は微弱、「瘤破裂だ!」、ストレッチャーを駆けるように押して手術場に運ぶ、正中切開とともに血液は噴出して吸引が間に合わない、小網を指で分けて腹腔動脈上で大動脈を把持して遮断鉗子をかける、途端に血圧低下が止まってパンピングする輸血とともに血圧は上昇に転ずる、執刀から遮断までこの間5分、というように診断・治療が容易であればよい。

が、外傷ではそうはいかない。噴出する出血、裂けた肝臓を助手に把持させても止まらない、「出血部位はどこだ! 肝破裂だけではないぞ!」、後腹膜は血腫で盛り上がっている、警告音が頭の芯で鳴り響く、「まずい、どうしよう、間に合うか」、別の自分が語りかけてくる——ここから先は本書を読むのがよい。

外科手術の進歩は、外傷手術と

ともに歩んできた。米国で血管外科が発達し、外科の基本手技として重要視されている背景には、第一次、第二次世界大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争、そして最近20年近くの間には展開されている中近東での戦争と、絶え間なく繰り返されている戦争に必要とされている戦傷外科への対応がある。救命率の向上、肢切断率の低下には、外科技術的な要因のみではなく、処置に至る時間をいかに短縮するかが大きな問題であり、改善にはヘリコプターの出現を必要とした。外傷手術は時間との闘いでもあり、現場に直面して教科書を開いている余裕はない。外傷手術で必要とされるのは何か、技、腕、巧みを垣間みて、いつでも取り出せるように記憶の底に納めておかねばならないもの、それが本書である。頭部を除いて、頸部から下肢まですべての外傷に対して、主には出血のコントロールを軸に損傷臓器への対応を含めて、到達法、

行すべき処置、ピットフォール、撤退の判断などが、小気味よいリズムにこなれた名翻訳で、読者を引き込むように読ませる。重大損傷とダメージコントロールがキーワードであり、外傷手術において目標とするところは何か、どこか、その戦略を的確に立てることの重要性を繰り返し強調している。まさに戦場で戦いそのものである。

評者は生活の糧を得るためもあって(本当は多分好きであったのだが)、30年間にわたって週に1度、湘南の150床程の外科系規模救急病院で当直バイトをしていた。1次から3次まですべての救急を扱い、多分数万人の患者を診てきたが、救急外傷が最も応用を必要とする領域であった。外科は外傷に始まり、外傷に終わる。30年前に本書を手にしていたら、助かる患者もいたのではないかと悔やまれる。臨床研修を終えて現場に立ち向かう新兵のみではなく、外科系を専門とする医師たちにとっても必読の書である。最後に、30年前に初めて手にして衝撃を受けたNorman M. Richの『Vascular Trauma』(Saunders, 1978)も併せて読まれることをおすすめする。

●A5/頁264/2006年/定価3,990円
(本体3,800円+税5%)
[ISBN978-4-260-00309-4]
医学書院 刊